
神様の落とし物

二神 切火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様の落とし物

【Nコード】

N6243W

【作者名】

二神 切火

【あらすじ】

人には七つの罪があるという。

『傲慢』 『嫉妬』 『憤怒』 『怠惰』 『強欲』 『暴食』 『色欲』

その罪をつかさどる七体の神と、その神を束ねる天の神。

いずれかの神を召喚し、使役する一族。天神家。その一族の二つの分家、

神を身の《外》に宿す、外神家。

神を身の《内》に宿す、内神家。

それらを絡めて弄ぶ謎の組織（未定）

すべてが交差するとき、人と神は再び繋がらう。

プロローグ（前書き）

気ままに書いてみました。

気に入ってもらえたら幸いです

プロローグ

【神様】っっていると思う？

俺は、そう聞かれたら確実にこう答えていた。

「いるかもしれないし、いないかもしれない」

だが、今はちがう。同じ質問をされたら今の俺は迷わずに、固定的な肯定の意をしめすだろう。

…例えば、だ。まあ、別に例えじゃないが、例えとしよう。

ある日突然、女の子が現れ、そいつが超が付くほどのわがままで、自分が落とした宝物を探せと命令してきて…

そしてそいつは【神様】で…

そんな例え話が例えじゃない話に変わったら？

…泣けてくるだろ？

これはそう、そういう物語。

後に歴史に大きく刻まれる『七つの災厄』のうちの二つ目の『災厄』

の物語。
。

第一厄 その出会いがまさしく災厄です1（前書き）

すいません。もともとこの第一厄、投稿済みだったんですが、何かの手違いで削除してしまっただけです。

慌てて書き直したので文脈におかしなところがあったら教えてください。

第一巻 その出会いがまさしく災厄です1

ドカツ…!!

勢いよくベッドから落ちた。

おかげでいつもより痛烈な朝だ。

いつもは落ちないはずのベッドから落ちた理由は知ってる。

「…おい。起きろ。姫歌^{ひめが}」

俺のベッドで寝ている妹の姫歌をたたき起こす。

おそらくはまた、夜中にトイレへ行った後、寝ぼけて俺の部屋に來たんだろぅが…そのたびに俺はこいつに蹴られてベッドから落ちて
いる。

一体これで何回目だ？

「うう…ん、ふぁ…」

俺の怒声に気づいて目を覚ましたであろう妹と寝返り様に目があった。全く…いい年してなんて様だ。Yシャツ一枚で寝てるとは…。

いくら春になって、少しは温かくなったからって、風邪を引きにくいという時期ではないんだぞ。

「おはよう…お兄ちゃん」

「とつと起きて自分の部屋へ行け」

「そ・の・ま・え・に」… んっ！」

そう言いつつ、目をつむり顎を突き出しながら、何かを求めている。

『何か』は言うまでもないが…正直言っつていい。

そう思った俺は手刀で姫歌の頭を割る。

ズガッ！！

鈍いような、それでいてインパクトが決まったような音が鳴り響く。

「ふえ〜ん…痛いよ〜」

「兄妹でそれは出来ないって何度言わせんだ！」

「兄妹って言っても血繋がってないもん！歳も一緒だし！誕生日だつて…」

そう、この妹、もとい義妹はちょっとした訳で家族になった幼なじみだ。

だが、こいつは昔から容姿があまり変わらない。

顔立ちまあ、正直言ってかわいい。青くストレートな長い髪に青く輝く瞳が姫歌の最大の特徴だ。だが、体があまりにも華奢過ぎる。それに顔がかわいいっていても体がそれに追いついてない分、ロリっ子に見えてしょうがない。

何年もこんな感じなんだから妹としてしか認識出来ない。

「…それについては親父達と決着がついたろ？海外に転勤した途端、その話題はやめてくれ」

「うう…。だつて」

「だつて、じゃない」

ズビシツ！！

再び手刀。

今度のは明らかにインパクトだ。

…結構、軽くやったつもりだったんだが…デコピン感覚で…

これはマズイ…よな…

「うう…」

そう叫んだ妹の瞳は潤んでいる。少量だがその涙が頬を伝っているのがわかる。

「…悪い。やり過ぎた」

いやまで。やり過ぎた所の話ではない。妹もとい義妹だからといっ

て女の子を泣かせちゃった。男として最低だ。

「あら。泣かしちゃったようね。椎名君」

刹那、唐突にかけられる声。ふと部屋の扉の前目をやるとそこには
姫歌の双子の姉であり、俺の姉でもある美歌がたっていた。

「ちょっと話、聞かせてもらえるかしら？」

「…はい」

そう答えるしかない。このねえさん…言動は穏やかだが、顔が笑っ
てない。

…そりゃそうか。自分の妹を泣かされたら怒らない姉はいないだろ
うな。

ていつか朝っぱらからめんどくさい事に巻き込まれてないか…俺…。

* II 2 (前書き)

第一厄： 第一話って事です。なのにそこに1とか2とかつけてす
いません。

さて、俺は現在、ねえさんからお叱りを受けているわけだが、全く。妹が妹なら姉も姉か…。

この人も好きだねえ、＼シヤツ。

なんだ？そんな恰好だと寝やすいのか？かさばるだろ！逆に…

「ちょっと……聞いているの？椎名君！」

「逆に寝にくいわ！」

「……」

「……えっ!？」

無言になるねえさんと呆気にとられる俺。そんな気まずい空気が流れる。

…が、一人のウザったらしい女の前ではそんな空気はこれっぽっちも気にならないらしい。

「まあまあ、お姉ちゃんに椎名も。そうカリカリしないでよ」

そう、姫歌にとってそんな空気は無意味だ。しかしこいつ…さつきは『お兄ちゃん』とか言つてたくせに今度は普通に『椎名』ときたもんだ。

「でも、でもね！？姫歌ちゃん…」

「はいはい、私はもう大丈夫だから。そもそも嘘泣きだし」

「…えっ？」

ハモる俺とねえさん。たった一文字でも『ハモる』って領域に入れているのかは謎だが、見事なまでに『ハモった』。

「だって、あんな弱めのデコピン感覚の手刀じゃ赤ちゃんだって泣かないよ、たぶん」

なるほど。あれで嘘泣きとは芸達者だ。芸能事務所の人がみたら思わずスカウトするだろう。なんせ長年の付き合いの俺もそうだが実姉まで惑わせたんだからな。

だがそれでも『思わず』だ。歳相応に体が追いついていたら『思わず』は『迷わず』に変わっていただろう。スカウトが来てもせいぜい子役だ。

パンツ…!!

そんな事を考えていたらねえさんがいきなり両手を勢いよく合わせて軽快な音を鳴らした。

「…なら、手打ちにしましょう。ごめんなさい、椎名君」

ねえさんらしい。元凶たる根源が発覚したらすべてを帳消しにしてくれる。

『底無しの抱擁』とはよく言われたものだ。

ていうか、なんでこの人、謝ってたんだ？

事の『根源』は確かに姫歌かも知れないが、『元凶』は俺だろう。

「何謝ってたんだよ、ねえさん。謝るのはむしろ俺の方だって」

「…じゃあ、さっきも言ったように何かで手打ちにしましょう。…」

そうね…今日の食事は椎名君だったわよね？だったら朝食は私が作るわ。あくまで朝食は、だけどね」

なるほど。それは確かに助かる。しかし、それではねえさんだけが損をして俺だけが得をした感じだ。

「なら俺は何をしようか…」

そう相手に聞こえないようにつぶやいて、何かいい案を考えようとした。

…のだが、どうやら聞こえたらしい。

「じゃあ椎名君は私を『ねえさん』じゃなくて『美歌』って読んでもらえるかしら？父さん達もしばらくは海外だし…ね？昔みたいに

今だけは『幼なじみ』に戻ろうよ」

幼なじみ、か…。そうだな。少なくとも『そこ』で踏み止まるべきなんだ。もう『あの頃』みたいには……。

「いかねえよな〜！！いいぜ！美歌！！って事で朝メシよろしくな」

そう今までの空気をぶち壊す勢いで叫ぶようにねえさん 美歌の言葉に肯定の意を示す。

「…うん」

そう呟いて微笑む。たぶん俺が何を考えていたのか美歌もわかってるんだろう。もう『あの頃』には戻れないと。この道を選んだのは俺達二人の合意の上だと。

「じゃあ、私も椎名って呼ば」

それまで全く存在を忘れていた姫歌が口を開いた。

「いや、お前既に呼び捨ててたから！！」

「ありゃ？そだっけ？」

「ふふ…。それじゃあ私は朝食の支度をしましょうか」

そう言っってイスから腰を持ち上げた。

だが俺はその行為を留める。

「ちょっと待ちなよ、美歌さん」

「誰が美歌さんですか」

「いやスマン。いきなりねえさんから美歌に替えるのは正直違和感がある。さつきは勢いに任せて美歌って読んだが、ありやたまたまだ。なんせそう呼ぶのは2年ぶりなんだ。善処してくれ」

「わかったわ。でも今日中には直してね」

「うむ。それで呼び止めたのはだな…姫歌にも関係があるんだが」

「何？」

「何かしら？」

二人がそれぞれの形で疑問符を浮かべる。

「ああ…。さつきから気になってたんだが、

ここは幼なじみとして言わせてもらおう」

「うん」

「どうぞ」

二人が頷く。

そんな二人に俺は言ってる。

「この時期にYシャツで寝るのは良くないって」

場は沈黙。

あれ、俺、何かおかしいこと言ったか？

カチャ…カチャ……

箸とお茶碗がぶつかる音だけが鳴り響く。

美歌が作った朝食を3人で囲み、会話もなく、箸を口へと運び続ける。

普段ならテレビのニュースをつけて

「へえ〜。なるほど、最近の流行りは○○か〜」

とか

「世間じゃ何かと物騒ね〜」

などの当たり障りのない会話が繰り返されているのだが、

そこはほら、さっき俺がYシャツの事を口走ったから？こんな空気が流れているらしい。

いや、俺は正論を述べたつもりだったんだが…

「そういえば、今日から学園か。早く支度しないとヤバくね？」

どうにか沈黙を破ろうとそうぼやいてみる。そのセリフのなかには少なくとも『何この空気！？さっさと学校行きたいぜ』という気持

ちが含まれている。

だが、そのはかなくも虚しい願いは頑として叶う様子はない。なぜなら…

「何言ってるの。今日は10時登校よ?」

だそうだ。

「え?なんで10時?」

「もう!昨日の夜も言ったじゃん!!今日は…」

どうやら今日は在校生の始業式が終わったらそのまま入学式に入らしい。入学式は13時から。俺達、新3年生は始業式終了後、学園内に装飾の飾り付けという作業があるとのこと。なんともまあ、雑用な使用だ。それでも俺達(3年)はまだマシな方だと言える。2年なんて、3年と同じ作業に加えて、校内清掃、新入生誘導、新入生歓迎の劇の運営などがあるらしい。まあ他にも色々あるらしいがハッキリ言っただけ知りたくもない。ていうか…

「最後のはいらなくない?」

「そんなこと私に言わないでよ。これも『新入生は何かと緊張してるから劇でちよつとでも…』っていう生徒会のはからいなんだから」

そう言う姫歌はどこか不機嫌そうだ。そりゃ当然といえば当然といえる。風紀委員の姫歌にとって新年度初日にそんな祭まがいなものを催されては迷惑以外の何物ではない。

「でも大丈夫じゃない？だってあくまで初日よ？」

今までしゃべらずに朝食を食べていた美歌が口を開いた。どうやら完食したようで一人、お茶を啜っていた。

「でも毎年一人はいるのよね。狂気的な問題を起こす人。姫歌ちゃんもたいへんよね」

「いや、もしそうなくても大丈夫。椎名達に助けてもらおうからね？」

そう言いつつ、何か期待の眼差しでこつちを見てくる。だが俺はそんな期待に答えることは出来ない。

「すまないな。今日は『召集』をかけていない。俺はともかく『俺達』では助けられないぞ」

「ええ？でも何かあったらみんな察して駆け付けるんじゃないの？」

「ああ。いつもならそうだが、みんな『出張中』だ。今、学園にいるのは俺と結城くらいだ。せめて残ってるのが結城じゃなくてミーナならたとえ『出張中』でも『召集』出来たんだが…」

「ふーん…。意外と役にたたないんだね。結城君も」

姫歌よ…。それを本人の前で言うんじゃないぞ。あいつはあれで結構デリケートなんだ。

「大丈夫よ。そんな事が起こつたら私たちのところから何人が派遣するから。これぐらいで三調律は乱れないわよ」
チューニング・トライアングル

…美歌の言う三調律とは学園内に置ける三つの勢力を表している。

一つ目は姫歌が委員長を務める風紀委員。活動内容の基本は一般の学校とさして変わらない。風紀を乱す者への制裁。といえば聞こえは言いがその実質は『制裁に手段を選ばない』というところにある。暴力、拷問といった、まあ人間性を疑う行動を行っていた。だが、姫歌が委員長となったと同時にそのルールを少しだけ改変した。いや、『少しだけしか』改変できなかった。

そして、その『少しだけ』で姫歌が創ったのが美歌が委員長を務める懲罰委員会。これが二つ目だ。しかし『懲罰』とは名ばかりでそれは風紀委員の活動内容を崩すためのものだ。

学園内において『底無しの抱擁』と言われることからその優しさの度合いがわかる美歌が懲罰委員に移籍したのならどう転んでも『懲罰』に悪いイメージは浮かばなかった。

つまり『暴力』は風紀委員が、『拷問』は懲罰委員が引き継ぐ事によって不正者を取り締まるルールを柔らかくしたのだ。

加えてこの二つの委員会…

役割が異質過ぎるため、『三つ目』の存在をひた隠しにしている。だがそれでいいと俺は思う。なぜなら『異質』という点においては三つ目の方が明らかに、いやさらにそれを上回るくらい異質だからだ。

ひた隠しに、というよりはむしろ隠れみものとして風紀委員と懲罰委員を目立たたせているという風にも捉らえられなくもない。

…いちいち、曖昧な発言を繰り返しているのは、それが俺の客観的私感だからだ。

つまりは三つ目、『諜報委員会』は一般生徒に認知されていない。いや、『認知』はされているが、『正確な活動倫理』が知れ渡っていない。俗に言われる社会の表裏で表すなら諜報委員会は明らかに裏だ。だが、設立構造がかなり複雑なため、表としての顔も持っている。それが『派遣委員会』だ。

というよりも『派遣』しつつ、『諜報』するという方が正しいのかもな。

…一般生徒に「便利屋」やら「雑務屋」とかと呼ばれているのは別として。

「準備出来たか？」

「ええ、大丈夫よ」

「姫歌は？」

「姫歌ならもうすぐ来るんじゃないかしら？ …ほら」

「ごめん。遅くなっちゃって」

「いや、いいさ。それじゃ行きますか」

玄関には俺と美歌。そして今しがた2階から降りてきた姫歌がいる。さつきまで髪を下ろして見分けがつかなかった二人だが（俺には見分けがつかないわけがないが、端からみたら、という話だ。無論、姫歌と美歌ではスタイルがちがいすぎているから二人をよく知る奴がみたら一瞬で誰が誰だかわかるだろう）、姫歌はツインテールに、美歌はポニーテールにしている。こうしてみれば、二人とも違った雰囲気のでていて、健全な男子なら見とれている事だろう。

玄関のドアに鍵を掛け、学園に向かって足を踏み出した。時間にして8時30分。10時に登校という前付けを明らかに無視していた。学園までは30分ほど歩けば容易にたどり着く。だからこの時間に家をでるのは少し早いと思う。

しかしそうした理由は美歌が朝食を食べ終わった後に口走った言葉が原因だった。

「さて、そろそろ準備しなきゃ」

「あれ？もういくのか？」

「いくら何でも早くない？ 今日懲罰委員ってなにかあった？」

お互いの思う所を姫歌と共に問いかける。そして美歌はうしろめいたような表情で、

「ええ…。昨年度にやり残した書類の整理をしなきゃならないの」

「「うっ」「」

それを聞いた瞬間、俺たち二人の声はどもった。

「風紀と謀報はそれぞれもう昨年度の分は片付けたんでしようけど、懲罰はそうもいなくて…」

なにせ人手が…と続けた美歌だがそんな事はどうでもいい。そしてそれはきつと姫歌も同じのはずだ。

「姫歌…」

「え！？ あ、はい？」

「…仕事、終わってるか？」

そして静かにはは、と笑って首を横に振った。

「よし、学校へ行こう！」

とまあ、こんな感じで今にいたるわけだが、正直、こんな状態じゃ『三調律』なんて成り立たねえな。うん、不思議とそれだけは言える気がする。何故なら美歌は「人手が…」とぼやいていたが、俺が所属している諜報委員会に比べればマシだと言える。

現在、諜報に残された人数は俺と結城の二人。あとの4人は面の顔『派遣委員』として『出張』状態だ。

「それにしても、ここまでくると一番大変なのは諜報だよな。何てったって人手が…。まあ、頑張りなよ」

ザ・他人事。こいつはもう少し気の利いた事言えないのか？

「まあ、手があいたらあたし達も手伝いに来るから。ね？ お姉ちゃん」

「ええ、 そうね」

前言撤回。やはり姫歌は愛すべき存在だ。

「…ありがとうな」

「お互い大変だしね。協力していかないと。 …特にこの時期は」

「…そうね。 やはり今回も？」

おそらく二人はさっき話した『狂気的な問題を起こす人』の事を言っているんだろう。

「その事ならさっき結城に連絡しておいた。 あいつもすでに市内のキナ臭そうな所はチェックしていたらしい。 だが、今のところは何も無いようだな」

「…へえ〜。 随分、下準備がいいのね、結城君は」

「けど気は抜けないよね。 例年が例年だから…」

さっきまでの陽気な雰囲気は一気にシリアスな雰囲気へと変わっていた。

しかしそれは前方からかけられた声で一気に元の雰囲気へと戻った。

家をでて15分の地点。ちょうど学校への道のりの中間地点にあたる交差点でその声の主は待ちかまえていた。

「おはようございます。先輩方。そして何よりもお久しぶりです」

「フィアナか…。久しぶりだな」

「おお～！ フィーちゃん久しぶり」

そこにいたのは懲罰委員2年、フィアナ・

K・クロステリア。アッシュブロンドの髪に翠の瞳。どこか気品さを思わせる整った顔立ち。年下とは思えないほど大人びている。

「ちゃんはおやめ下さいと何度も申し上げたつもりなのですが…」

名前からわからないが、本人いわく日本人とイギリス人のハーフらしい。

「可愛いからいいじゃん」

「そうは言われなくても…」

「そっぴや、何でフィアナは待つてたんだ？ 今日とは別に待ち合わせしてないだろう？」

「はい、実は私も昨年度に残した仕事の事を気にかけておりまして。それで先ほど美歌先輩に連絡したところ、今から学園に向かうとの事でしたので、失礼ながら賛同させていただきます」

「そういうことか」

「それにしても、その話し方どうしたの？」

そう問いかけるのは美歌。確かにそれは俺も気になっていたところだ。

「はい。自分で申し上げるのは少々あつでがましいことなのですが、皆様も御存知の通り私は変わった体質の持ち主なので…」

変わった体質。フィアナは周りの影響を極端に受ける体質らしい。言語、口調、行動、仕草、はたまた思考回路まで…。たとえば自分が自分の意志に反していても、だそうだ。その影響から抜け出すのに三カ月はかかるらしい。…もしくはミーナの『術』を使うか、だな…。

「なるほど。じゃあ、イギリスに戻ってたのね？」

「はい、不本意ながら春の休暇は本国の方に…。ようやく、日本語に『戻れた』のはつい昨日の事でして…」

…いったいこいつの実家はどうなっているんだろうか？ もしやめちゃめちや金持ちの貴族様なのか？ それとも英国人とやらはみんなこんなお上品なお口調なのでしょうか？

「何ぶつぶつ言ってるの？」

「い、いや。何でもないさ。それよりも姫歌、全くもって忘れていたが、早く学校行かないとヤバくないか？」

「あつ…」

そつだ。例年の事件の話や、久々にフィアナに会った事もあつて、『昨年度の仕事の残りを片づける』という目的を忘れていた。

「や、ヤバいよ、椎名！！　こんな事してる場合じゃないよ」

「あ、ああ…。悪い、美歌。フィアナ。俺たち先行くわ」

そつ言つて姫歌と一緒に走り出そうとした。しかし、

「何言ってるの？　学校ならもう目と鼻の先じゃない」

「…え？」

言われてみると、直線100メートルも充たない距離に学園の門が見えた。

「…いや、この距離を悠長に歩く時間さえもつたいねえ！！　いくぜ姫歌！！」

「アイアイサー！！」

そう言って二人で走る。

そしてその勢いのまま、校舎敷地内へ…

『ウー！ ウツー！！』

はいれなかった。

「…あれ？」

いや、はいれてはいるが、敷地に入った瞬間、対不審者用のサイレンが鳴り出した。

いや、俺ここの生徒ですけど？ 不審者じゃないですけど!？

「…まさか椎名…。個別学生認証、忘れたの？」

「…」

「あれ、どうしたの？ 二人共。ていうかこのサイレンの方がどうしたの!？」

そこにやって来たのはさっきの二人。

「いや、椎名が認可証、忘れたっぼくて」

「ええ！？ そうなのですか、椎名様！？」

「……」

「と、とりあえず取りに戻ったら？ そうすればせめて10時までには戻ってこれると思うわ。このサイレンは風紀と懲罰権限で止めて置くから」

「……なんか……もう……疲れた」

そりゃそうです。ここまで来たのにまさか認可証を忘れるとは。我ながらバカだと思えます。

「……とりあえず……認可証、取りに行くわ……」

そううなだれつつ、身を翻して、来た道を再び歩き出す。

背後からはけたたましく鳴り響くサイレンと、弁解は任せといてね」と叫ぶ姫歌の声が聞こえていた。

個別学生認可証。全体的に白く、銀色の校彰がほられた手帳。俗に言われる学生証だ。だが、それを学生証と呼ぶ奴はこの学園にはいない。なぜなら、学生証は『学園の生徒である事を認める』ものであつて、個別学生認可証はそれ以外にも様々な役割をになつてゐるからだ。

例えば、自動販売機。ポートの部分に個別学生認可証をかざすだけでタダで飲み物が飲める。といった具合だ。

俺達が通う学園、皇学園の生徒はいずれの公共サービスは認可証を持つてゐるかぎり、『タダ』でサービスを受けられる。

医療機関の利用しかり。電車、バスの運賃しかり。飲食店も、コンビニも、何から何まで、だ。

持つてゐるだけで、すべての行動が認可されている。故に生徒は『認可証』と呼ぶ。もしくはこの手帳が一人しか使用できないことから、『個別証』と呼ぶ奴もいる。…『何でも帳』とかいう奴もいたな。

「いや、そんな落書き帳みたいになんて言わなくても…」

玄関のドアの鍵をあけつつ、俺はそうぼやいた。さきの学園に入れなかったので、認可証を取りに来たわけだ。

玄関のすぐ横にある階段を一直線に駆け登り、自分の部屋にある机の上を見渡す。そこには黒塗りの、そして金色の校彰がほられた手帳があった。

「ブラック・アカウント…黒の個別情報体か…」

一般生徒のソレとは違う認可証を手にとってブレザーの内ポケットに入れた。

「さて、いきますか…」

これで学園のセキュリティはなんなく突破出来るはずだ。

「仕事の整理は…もうできないな」

もう、何て言うか…。笑うしかねえ。

「はは、…はあ」

そしてその後溜息吐くしかねえ。

「……まったく。書類くらい家に持って帰らせろってんだ」

学長曰く、風紀と懲罰と諜報は機密事項を扱う委員会のため、校外での活動を禁ずるんだそうだ。ていつか……。

「学生に機密もクソもねえだろ！！いや、まあね？諜報はいろいろと秘密にすべきことあるけどさ！！派遣委員にそれはないんじゃないかねえの？便利屋とかって呼ばれてんだよ？」

と独りで心境をぼやいても、……いや、叫んでも何も始まらないな。

「……学園行こう」

玄関に鍵をかけてそう呟いた。

さっきも見た光景を再度見ながら学園へと向かう。一つ違うのは道行くひと達の中に学園の制服を来た奴らがいるくらいか……。

ふと、腕時計をみやると既に9時半を回っていた。……まあ、中間地

点は越えたから遅刻する心配はなさそうだが、今日はどこかしら不幸が付き纏ってるみたいだから、少し急ぐかな。

そう自分に言い聞かせた、次の瞬間…。

「…！ ……！！！」

(ん?)

何やら怒鳴り声のような物が、聞こえた気がした。…聞こえてきたのは空地奥の建設途中だったデパートのほうか…。

その付近の道行く生徒を見ると、明らかに『見て見ぬフリ』を決め込んでいる。

「…はあ。何でこんな朝っぱらから…。人の気持ちを考えたことあるのか」

俺は静かな怒声を呟いて、声がした方へ歩きだした。そして、そこを一望できる辺りまで来たところで、「やっぱりか…。はあ…」と、いい加減自分でも聞き飽きた溜息を吐き出した。

そこは漫画やアニメに出て来るような、『不良がカツアゲする現場』

のような場所だ。そして今、目にしているのは正にソレ…。

「だから、持ってないって言ってるじゃないですか!！」

「おいおい、嬢ちゃん。皇の制服着といて持ってないって事は無いだろ!?! さつさと『何でも帳』とやらを出せよ!！」

「だからもってないんです!! 私は転入生で、その学園には今日から登校だから『何でも帳』とかわけの分からないもの、持ってるわけないの!！」

絡まれてる女生徒は、若干遠目なため(ていうか俺は目が悪い)見えづらいが、長い黒髪をなびかせている。背は俺より少し低いくらいか…。

(大和撫子って奴だな)

絡んでる奴はガタイがでかく金太郎辺りがいい呼び名かもしれない。

……俺としてはその後ろで控えている細身の眼鏡野郎が気になるが……。

どうやらこの体格が真逆な不良共は近隣高校でも屈指の問題校『来栖学院』の連中っぽい。

(やべえ…。めんどくせえ。てかうちの学園、転校制度無いんだが…。それ以前に何であの女は喧嘩ごしなんだ?)

「フフ。…仕方ありませんね。こうなったら体に直接聞きましょうか?」

「おお!?! やっちゃんいますか? 確かにこの上玉ならボスも喜ぶっしょ!?!」

(……………)

俺はそれまで考えていた思考を停止。

「その兄さん達。そこまでにしといたらどう?」

静観していた俺はそれを止め、男一人にそう言い放った。

「なんだてめえ」

それに気づいたガタイのいい男は身を翻し俺にそう言いながら睨み

つけて来る。

「彼女を引き取らせてもらう。抵抗するなら容赦はしないが？」

そう言いながら、さっき内ポケットに入れた認可証を見せつける。

「はあ！？ なにそれ？ 水戸黄門にでもなつたつもりか！？」

怒声をあげつつ、俺に近づこうとする大男。しかしそれを眼鏡野郎が軽く手で制す。

「…やめなさい。忘れたんですか？ 彼が持っているのは『黒の認可証』。事を構えるのは些か不粹というやつです」

チツと舌打ちする大男をいなしながら眼鏡野郎は俺に向き合った。

「いや〜。連れが失礼しました。それじゃあ私たちはこれで。いざ
れ『また』…」

二人去っていく後ろ姿を見ながら、

「いや、もう二度と会いたくねえけど！？なんだよ、またって」

と叫ぶ俺に後ろから話かける女生徒が一人。

「あの…どうもありがとうございます」

(アレ？ さっきの喧嘩ごしっぷりが感じられなくなったな)

振り返って再度彼女を見てみると、

「うお…」

という言葉しか出て来ない。ヤバいが…可愛すぎる。姫歌も美歌も可愛いほつだがこの女生徒は段違いだ。今時珍しい長い黒髪に漆黒の瞳。体格は美歌と同じくらいか。

「あの！聞いてますか？」

「え？ あ、はい？」

「実は私、転校の手続きをしないといけないので、これで…！お礼は後日改めて」

「ああ、そんなのいいから。ていつかうちに転校制度は…」

そこまで言っただけなのに、彼女はいつのまにか俺の目の前からいなくなっていた。

「は？ 消えた？ いやいや『一般生徒』にそんなこと出来るわけ……。ま、いいか」

過ぎたことはしょうがない。人生前向きに、あるがままをみて、受け止めて、理解しなきゃな。

「いや、ていうか……」

ふと目に入った空き地に設置されている大きな時計の文字盤を見ると、既に10時5分前まで針が進んでいた。

「遅刻じゃん！！ ……ま、いいか。人生前向きに。って出来るか！
！ 初日から遅刻ってどんなんだよ」

それでも俺は学園に向かって歩を進めた。

椎名が空き地に設置されている時計をみて、驚愕してからその場を立ち去ろうとする後ろ姿を建設中だったデパートの屋上から見下ろす人影がふたつ。

「…それで？ どうすんだよ」

その中の体が大きい男がそうばやいた。

「いえいえ、どうもいませんよ。彼が黒の認可証を持っているって事は恐らく三調律に関係する人物。あんな『ただ者じゃない集団』に関わるつもりなんありませんよ」

眼鏡をかけたいかにも優男というイメージだが、纏っている空気がそうじゃないとおもわせる。どうやらこの二人は先の女生徒を脅していた不良のようだ。

「けどオメーならどうにかなったんじゃないかねえか？」

「…貴方はもうちょっと敵を見定める感覚を研ぎ澄ませたらどうですか？ いくら私が『殺人術』を学んでいたとしても、恐らく今の少年には敵わないでしょうね」

「…そなの？」

「そうですね。多分、赤嶺さんでもてこずるんじゃないですか？」

「…ボスも手こずるほどののかよ。ますます恐ろしいぜ、皇学園」

「なに…。既に『布石』は校内に潜入させました。後は『強欲』と『怠惰』の名の元に認可証を集めまくれば、計画の第一段階は終了です。そうすればいくら三調律が働きかけようが我等に敵は無いです」

なにやら不穏な事を口走る彼らは、得に眼鏡をかけた少年からはそれこそ明らかに『ただ者じゃない空気』が感じられた。

「さて。そろそろ行きますか。『神狩り』……再開ですよ。フッフ」

そして彼等は踵を歸し、屋上を去った。

体育館。そこに敷き詰められるようにおかれた椅子には皇学園の在校生がすわっている。俺も例外ではない。

「え、それでは今年度も皇学園の生徒であるという自覚をもって、勉強に励んで頂きたい。以上だ」

この間延びた声で演説をしていたのはうちの学園長、美苺^{みかるまなび}学。なんと齡22歳…。突っ込みたいことはいろいろあるが、まあやめておこう。

「にしても、おめーが初日から遅刻するとわな」

学園長の挨拶が終わると同時に左隣から俺に話しかける奴がいた。

「そついうおまえだって遅刻していたじゃないか。結城」

朝から少しだけ触れていたが、こいつが結城という奴だ。本人いわく下の名前は誰も知らない。という事にしてほしいとの事だ。そついった謎の存在がかつこよさを引き出すらしい。…ていうか、学生名簿にはしっかりと結城^{ゆづるかすみ}と書かれてはいるが…。

俺が学園に着いたのは、10時を少しまわった時の事だ。しかし、校門をくぐる手前、結城とでくわした。つまりはこいつも遅刻したということだ。

「いや、今日さ、普通に登校だと思って来てみたら、誰もいねえじゃん？ そしたらおまえから電話かかってきて今日の登校時間を教えてもらったわけよ」

なるほど。どうやら俺がさっきこいつに電話したとき、今日の予定を聞いてきたのはそのためらしい。

「…それで、一旦家に戻ったら遅刻したと？ 馬鹿だな」

「うっせーな。そういうテメエはどうなんだよ」

「…人助けしてたら遅刻した」

別に嘘は言っていない。しかし結城は「そんな言い訳で済んだら、警察いらなげ」と肩を竦めていた。

そんなおり、司会のアナウンスが館内に響く。

『これにて、始業式を閉式といたします。なお、広場の方にクラス替えの紙を貼っておりますので、自分のクラスを確認後、教室でHRを受けたら各自、入学式の準備にあたってください』

聞き終わると生徒たちは一斉に席を立ち、流れるように館内を後にする。俺も例外なくその流れにのる。まるで、休日の町の人波に揉まれるようにしながら、俺と結城も館内を後にする。館内から出た生徒はみな広場の方へと向かっていた。しかし、そこへ行くための道は二つあり、裏庭を通るか、中庭を通るかで、大半の生徒の行く道は二分されている。そのため、さっきまでの人の波ってものは多少なりとも柔らんでいた。

そんな裏庭にも中庭にも向かわずに体育館の玄関横で壁にもたれるようにして俺と結城は佇んでいた。先に口を開けたのは結城の方だった。

「んで？。どうすんよ」

「どうするって何を？」

「クラス替え、見に行くのか？」

そう俺に尋ねて来る結城。本来、こんな質問自体がおかしな事と言えるだろう。クラス替えの貼紙を見に行く。普通ならそれが当たり前なんだから。しかし、三調律を担う俺達にとってその行動はあまりにも意味を成さない。だから俺は答えてやる。

「どうせ俺達は同じクラスだよ。…まあ、美歌辺りは見に行つて
らるうから、念のため後で聞くとしよう」

「……」

しかし、何故かそこで黙る結城。

「なんだ？ やっぱり見に行くのか？」

「いや、そうじゃなくてさ。…呼び方、戻したんだな」

「え？ あ…ああ…」

いきなり脈絡のないことを言う結城に対して、俺の声は裏返ってしま
う。おそらくは『姉さん』から『美歌』に呼び方を戻した事を言
っているんだろう。

「…今朝な、戻した。といつても親父が帰ってくるまでの間だけだ。
まあ、つつこまないどいてくれ」

ヤレヤレと嘆息をもらし、懇願するように俺は結城を横目でみやる。
すると何故か結城は微笑んでいた。

「いや、別に突っ込むつもりはないよ」

「…じゃあ、何で笑ってたんだよ？」

「やっぱりお前らは、ありのままのお前らであったほうがお前らら
しいと思っただけさ。しかしまあ、よくそう易々と呼び方を替えら

れたものだ。起用だね、椎名君は」

「いや、これでも結構、時間かけたんだぜ」

「どれくらいよ？」

「……5分くらい？」

「短かつ！！！」

そんな他愛もない会話を繰り返していると過ぎ行く生徒の中から声をかけてくる女生徒がいた。

「あ、いたいた。もう、どこに行ってたの？ 心配しちゃったじゃない。あ、結城君、おはよう」

噂をすればなんとやらって奴か。俺達に声をかけてきた女生徒美歌が目の前で立ち止まった。その傍らには姫歌もいる。結城は適当に「うっす」と会釈する。

「心配も何も、俺は普通に過ごしてただけなんだが……」

「右の意見を肯定」

俺の左側に立っている結城がそう告げる。

「まあまあ……。お姉ちゃんは心配してたんだよ。『ああ……。椎名君

は無事登校出来たのかしら』って。おかげで式中もずっとソワソワしてたもんね?」

「ちょ、ちょっと…」

急に饒舌になる姫歌。美歌も何故か顔を赤らめている。確かに俺は再登校してから美歌たちと話すのはこれが初めてだ。美歌の心配性を考えるならメールの一つでも送れば良かったのかも知れない。ここは素直に謝っておいた方がいいだろう。

「すま………」

「ていうか、見に行かないの? クラス割り」

謝ろうとしたところでまるで割り込むかのように姫歌がそう告げた。

「うおい!! 人が謝ろうとしてんに割り込むなよ!」

「え? お前こんな事で謝んの? なんか安っぺえ〜」

「うつせえな、結城。まずはテメエから謝まらせてやるつか?」

「すみませんでした」

一瞬にして謝りだす結城に美歌も姫歌も苦笑しているようだ。

「なんか結城君の方が安っぽいね。まあいいや。で、見に行かないの？ クラス割り」

美歌は「俺は安っぽくねえよ」とわめく結城を無視して続ける。

「俺はお前らが見に行ってくれてると思ってたんだが」

「それならみんなで行きましょう。その方が何かと手っ取り早いでしょう？」

美歌の提案に対して皆が肯定し、「じゃ、行ってみよう」と姫歌が先陣をきりながら次に結城、美歌と俺の順でその場を後にする。そして、俺は右肩のすぐ横にある美歌の頭に手を置く。撫でるように髪を梳きながら、さっきの出来事を改めて蒸し返す。

「…すまなかつたな。今度からはちゃんとメールとかするからさ」
顔を赤らめながら俺をみやる美歌。

「…別に大丈夫よ。…それより…手…」
「手？ ああ、ゴメン！」

俺は慌てて美歌の頭から手を下ろす。

「悪いな…。ついクセで」

俺は姫歌と美歌に限り、頭を無性に撫でたくなってしまっ。ミーナいわく『変態シスコン野郎』だそっだ。

「ううん。…別にいいんだけど…むしろそのままです…」

許しが得たのはいいが、最後の方がうまく聞き取れなかったな。

「ん？ なんだって？」

「な、何でもありません！」

…あっそ。まあ、本人がそう言うのならそうなんだろう。

「あ、そうそう。三人とも」

先行していた姫歌が振り返って、俺達をそれぞれ見回した。

「なによ？ 姫歌うち」

結城の冗談めかした呼び方を無視して姫歌は話続ける。

「さっき学園長から教えてもらったんだけど…。どつちらうちのクラスに転校生が来るらしいんだよね」

「…はっ？」「…唐突な姫歌の宣告に俺達三人は同時に疑問符を浮かべた。

「いやいや、この学園に転校制度は…」

そこまで言っただけで俺は気づく。さっき助けたうちの女生徒は自分を「転校生」だと言っていた。しかも姫歌の話が確かなら学園長公認、しかもうちのクラス…。ならあの女生徒は『一般生徒にはなりえない存在』ということだ。

「…あれ？」

俺はさらなる疑問を浮かべ、耳元では「どうかしたの？」という美歌の囁きだけが聞こえていた。

椎名がそんなことに懸念している頃、学園長室には一人の女生徒が佇んでいた。

来客用のソファに腰を落とし、事務員にだされたコーヒーに口をつけると、まるで満足したかのように微笑みながらカップを置いた。

そんな彼女といえは黒髪に漆黒の瞳。身長はさして高くない。顔立ちは見事に整っており、まるで大和撫子のようなようだ。そう、さっき椎名が不良から助けた自称・転校生である。

もっとも、もう自称などではなく、彼女が学園長室にいるという時点でそれは公認の事となっている。

嘆息の混じった声で彼女はつぶやいた。

「...どうしてこんな事になったのかな」

どうも話の筋がわからないような言葉だが、しかし彼女の次に連ねるのである言葉は勢いよく開かれた学園長室の扉の音で遮られた。

洗礼な装飾が施された扉から現れたのはハワイアンな服装の男。あまりにもこの場に相応しくない人物というのが、端からみた第一印象だが、彼ほどこの場に相応しい人物はいない。

「遅かったじゃないですか…。学園長」

「いや〜ごめんごめん。新年度ともなると何かと忙しくてさ〜」

「…あんな適当な挨拶で、よくそんな事が言えますね」

「……見てたの？」

「いえ、見てないです。けどその反応からして、どうやら適当な挨拶だったみたいですね」

してやられたように学園長である美莉 学は肩をすくめ、まるで呆れたようにつぶやいた。

「全く…。君ほど人を食った性格の奴は久しぶりにみたよ」

「ありがとうございます」

「いや、褒めてないからね!？」

ため息を漏らしながら女生徒の向かいの椅子に腰掛ける学。

「じゃあ、これ。渡しとくから」

そういつて彼が取り出したのは黒の認可証。それを開いて女生徒に

渡す。写真を貼りつける部分にはすでに彼女の顔写真があった。

「黒の認証証ですか…」

「ああ。一般の人はそう呼ぶけどね。正式には黒の個別情報体^{ブラック・アカウント}って言うんだよ」

「…中二ですか？」

それを聞いた学はやるせなさそうに含み笑いを浮かべていた。

「いや、それを言われるとイタいんだよね。何せ、考えたのは僕じゃなくて今から君のクラスメイトになる奴何だけど」

学は前屈みになっていた体を一気に背もたれへと預けた。

「しかし、どうしてまた、この学園に？ 『君という存在』がなぜ人一人にこだわる？」

「…それはまた後で話します」

そう言っただけで彼女は立ち上がり、学の後ろにある窓に歩み寄った。そこから見渡せる広場は生徒たちで行き交っていた。行き交う先は広場の中央。クラス分けの紙が貼られた所だ。

「天神の三人に会ってからでも遅くはないと思います。…積もる話

もありませんし」

彼女はひたすらに生徒たちの波を見てそう言った。

広場前へとやってきた。やはりというか、当然というか……。ここから見える広場の中央は生徒たちで行き交っていた。目的はおそらく、てか確実にクラス分けの貼紙だろう。中央部からこちら側に戻って来る生徒たちは「何組だった?」「私、B組」などと当たり障りのない会話をしている。

「ありやりや〜 なかなかどうしてめちやくちやなアレだね〜」

「ドレだよ」

広場の中央をみながら姫歌はそう言った。ていうかこいつは今年度何のキャラを押ししていくつもりなんだ? 俺はそんな姫歌にとりあえず突っ込みを入れてから話を先に進める事にした。

「どうする? どうせみんな同じクラスだろうし、誰か一人の名前を確認できればそれでいいんだろっけど……」

「つつてもあの人だからじゃな〜」

結城は嘆息を漏らしながらそう言った。

「こっとなったら……。姫歌よ」

そういつて姫歌の両肩に手を置く。身長差が20センチほどあるせいか…。妙に置きにくい。まあ、それはともかくとして俺は一つの提案を提示する。

「お前のその小さい体を活かし、あの人込みのなかを突き進んで、貼紙を見てきてくれ」

「うん。わかった。じゃあ、ちょっと行ってくるよ」

そして踵を歸し、走り去った。思ったが再び踵を歸し俺の元へと戻ってきた。

「…って、出来るか!! いくらあたしが小さくても人込みをすり抜けられるわけないでしょ! バカ椎名!!」

「いや、だからすり抜けるんじゃないよ、突き進むんだよ」

「なおさら、出来ないわよ!」

「…あそ」

「とりあえず、近くまで言ってみない?」

美歌のそのまともな提案（少なくとも俺の提案よりは）で俺達は広場中央へと向かう事にした。近づけば近づくほど人がどれだけいるのか実感できる。貼紙が貼られた位置から15m程離れた所。そこで足止めをくらうほどの人ばかりだ。貼紙は見えるといえば見えるが、比較的目が悪い俺からすればみんなの名前なんてただの点だ。結城はといえば「ここからじゃ良くわかんねえな」と両手を左右に振り、降参の意を見せていた。美歌は前に立っている男子生徒の頭が邪魔なんだろう。懸命に背伸びして見ようとするが、こんなアンバランスな背伸びだと貼紙を見るに見れないんじゃないかと俺は思う。…姫歌にいたってはジャンプしてるな。それでも何度もジャンプして悔しがる辺り、やはり成果は得られていないんだろう。

「で、どうするよ？ 自然と人が消えんの待つのかい？」

結城のその一言で俺達三人は懸念しはじめる。そんな時、目前の人込みから聞き慣れた声が出た。

「も、申し訳ございません。ちょっと通して貰えないでしょうか？」

「……きゃっ」

最後の奇声と共に人込みから俺達の前へと抜け出て来たのはフィアナだった。淡く輝くアッシュブロンドの長髪は人波に揉まれたせいか、グシャグシャになっている。

「うう……。何で私がこんな目に……」

体をうなだれるようにしながら地面に倒れ込んでいるフィアナ。おそらく、この人波に揉まれるのは相当な疲労だったのだろう。

「おい、フィアナ…。大丈夫か？」

俺が声をかけるとフィアナはハッと顔を上げた。俺達の事を一通り見回した後で慌てて立ち上がる。どうやら俺達には気づいてなかったらしいな。

「も、申し訳ございません。見苦しい所をお見せしてしまって」

「いや、何でそこで謝んだよ…。それより髪、どうにかしたほうがいいぞ」

「髪？ ……ひゃあああ！！」

俺に言われるまで気づかなかったのか、自分の髪をポケットから取り出した折りたたみ式の手鏡で確認した後、奇声の交じった驚愕の声を上げるフィアナ。…それと同時に向けられる回りからの視線が痛い。

そんなフィアナを見かねたのか、美歌はどこからともなく取り出したブラシでフィアナの髪を梳きはじめた。

「それで？ フィーちゃん、何組だった？」

美歌が髪を梳き終わるのを待ってから姫歌が聞いた。こんな事を聞くのは他でもない。なぜなら三調律のメンバーは同じクラス。そして学年は違えど、クラス番号は同じの兄弟学級になる。（1学年は委員会に入る前なので例外だ）つまりフィアナのクラスを聞けば、自然と俺達は何組か分かるという寸法だ。∴最初からこうすれば良かったんだろうが、みんながみんな、この思考に到るから、結局誰かが見に行かなきゃならない。終いには新年度最初のHRに集団遅刻ってわけだ。（実際、去年がそうでした）

「…え？ 先輩方はまだ貼紙を見てないんですか？」

「いや、まだ見てねえからこんな所にいるんだけど…」

結城の言う通りだ。すでに貼紙を見たならとつと自分の教室に向かっている。

「そうですね。…大変申し上げにくいのですが…」

『？』

俺達全員は頭に疑問符を浮かべる。何組かを答えるのに何故そうかしこまる？

「どつやら、三調律のメンバーは全員が全員、今年度から一緒のクラスになるそうで…」

『…は？』

みんな一斉にその一文字。そりゃそうだ。全く以って、意味がわからん。

「それってつまり、今のところの風紀と懲罰、それに諜報のメンバーは学年なくして同じクラスになるって事？」

おお！ さすが美歌！！ 理解が早くて助かる。

「はい。学園長にメールで確認もしましたし、間違いないかと…。しかも担任は学園長自らがつとめるそうで…」

「はあ？ 何考えてんだ！？ あの变态！」
そうわずかながら怒気を含んだ声をあげたのは結城だった。…何故
变态？

「ていうか、そうなっちゃったら色々とマズイんじゃない？ なんてたって学年を無理矢理上げたわけでしょ？」

「ええ。姫歌先輩のおっしゃる通りです。その旨も含めて、先程のメールで聞きましたところ、『飛び級扱いにしといたから（笑）』と返ってまいりました」

「軽っ！！ その程度の問題なのか、これっって!？」

「いや、椎名よ。これが美効 学という男だ。あの時だっ…。うう…鳥肌が…」

結城の手を見ると本当に鳥肌が立っていた。どうやらトラウマに触れたらしいな…。

「…とりあえず、こうしていても始まらないし、みんなで教室いかない？ そろそろHR始まるし。転校生もくるらしいし」

…その転校生で思い出した。思い出してしまった。いや、正確には姫歌が『転校生が来る』と言った時から頭をよぎっていたが、なるべく考えないようにしていた。いやいやまでまで。よく頭を整理してみる。

…『転校生』がくる。そしてその子に絡んでた『来栖学院』の生徒。…因みに今日は入学式。まずくいけば、『例年の事例』が起こる日。そして何故かわからない学園長の『奇妙なクラス替え』

「……新年度早々、めんどくさい事に巻き込まれてるな。まあ、姫歌にベッドから蹴り落とされた時点で何となくわかってはいたんだが……」

「何ぶつぶついつてんの？ 早くしないと置いてくよ」

姫歌にそう言われ、すでに教室へと歩き出したみんなの後ろを俺は歩いた。

この時俺は『これ以上、めんどくさい事は起きない』とかつてに解釈してた。…最もめんどくさい事はこの後に起きるんだと微塵も思っことなく……。

* 110 (前書き)

投稿が遅れたので、少し長めに書かせていただきました。申し訳ございません

そして、教室へとやってきたわけだ。場所は普通科棟3階。3年生になったわけだからまあ当然だ。しかも一番日当たりのいい教室、1組と来た。廊下に出て、窓から眼下を見ればさっきまでいた中庭が見える。そして、この棟を西側とし、対面してある東側には教員棟と専門教科棟が併設した校舎がある。そこを1階と2階から渡り廊下で繋いでいる。つまりこの学園は見方を変えれば工の字を取ってるわけだ。……いや、北側に部室棟や多目的室とかがあるからどちらかと言えば江の字か……。まあ、何はともあれ、環境的には何ら不満はない。

しかしこうなると色々とめんどくさいのは、教室内で話をしている奴らのほとんどが俺達と関わりのある人物だということだ。

風紀の奴らに懲罰の。そして謀報は……。俺と結城……。そこにおまけとでもいうように生徒会のメンバーがいる。

本来なら生徒会は学園の中心的な存在なのだろうが、ここでは違う。実際問題、三調律のお荷物でしかない。無論、俺はそう思ったことはないが、なんせ周りがね……。

その事もあってか現生徒会副会長の雨玖 ウツク 幸之は俺達を毛嫌いしている。(会長はただいま留学中) それもあってか、教室には何か

とめんどくさい空気が流れているのは恐らく、俺の気のせいでは無いはずだ。

教室に入ると最初に目に入ったのは黒板にでかかど書かれた文字だった。

『席はご自由にどうぞ』

そう書かれた黒板に俺はなぜだか憤りを覚えずにはいられなかった。それは多分、こんな適当な事を言い出す（書き出す）のは学園長的美莉 学しかないからだど肌で感じていたからに違いない。

「アタシ、一番うしろ」

黒板をみるなり、姫歌がそう言った。姫歌は去年一年間、廊下側ではないベランダ側の一番後ろ、つまり一番いい席を独占していたわけだが、どうやら今年もそのつもりらしい。

姫歌がその席にこだわるのは理由がある。姫歌は身長が低い。だから一番後ろの席だと……眠り放題だ。因みに姫歌の前には必然的にやや身長が高めな俺が座り、そして姫歌の斜め前、つまり俺の隣には、俺と身長が大差ない結城が、やはり必然的に座る。こうすると教壇の方から姫歌はほとんど見えなくなる。因みに美歌は姫歌の隣に座り、いざというときに彼女を起こす役だったり、彼女の分の

ノートを取る役割（あくまでも自主的に）がある。……こうして考えると風紀委員長にも関わらず一番風紀を乱しているのは姫歌だな。姫歌が席に着くと同時に俺達は当たり前と言うように定位置に着いた。因みに俺の前には決まってミーナが座っていたが、彼女が不在な今はフィアナが座ることになった。

こうして一気に席を占領すると席が足りなくなるんじゃないかと思っただが、そうでもないらしい。そもそも三調律は全員あわせて18人しかないからな。後の二十人位の奴らは必然的に生徒会ということになる。

「…にしても学園長も難儀だな。クラス替えの事、フィアナには教えてるのに…。姫歌とはさっき会ったんだろ？　ならその時、教えてくれないだろ」

「やっぱり転校生に浮かれてるんだよ。どんな子かな？　女の子かな？　女の子ならフィーちゃんみたいにかわいい子がいいな」

「…や、やめて下さい。私がその…か、かわ…いいだ…なんて」

「うん…。フィアナちゃんはもう少し自分のかわいさを自覚したほうが良いんじゃないかしら」

「ええ！？ 美歌先輩まで……」

「ねえ？ 椎名君もそう思うわよね？」

何故、そこで俺にふるか、美歌さんや……。でもまあ、ここで答えなかつたら、後の空気が悪い。だから俺は正直に言ってる。

「そうだな……。フィアナはかわいい。多分この世界で一番かわいい」

最後の方は冗談めかして言ったつもりだったが、何故かフィアナは顔を赤らめ、

「し、椎名……様……」

と返してきた。何その反応？ 言った手前恥ずかしくなってきたぞ

「ま、かわいいなんて同性に言われるのと異性に言われるの……ましてやそれが気がある奴からの物なら何てったって『味』が違っよな。フィアナさんよ……。クッククク」

最後に不気味な笑い声を浮かべ結城がそう言った。俺がその言葉の真意を探る前に、

「椎名君……」

「お兄ちゃん……」

ゾク……。つとするような声で姫歌達が呼びかけてきた。(ていうかなんで今更お兄ちゃん?)この何故か怒り気味の二人をどうするか考えた結果……

「さて、HRまで一眠りするか」

流すことにした。当然だ。何をしたのかわからないのにキレられるのはゴメンだ。

「「逃げるなー!!」」

と叫んで来る二人を無視して寝ようとした。が、虚しくも教室の扉が開く。そこから入ってきたのは学園長だった。どうやらいつのまにかHRの時間になってたらしい。…てかHRの時間って何時だよ。ちゃんと連絡回せよ。

黒板の上の方に目をやる。時間は11時34分。……ハンパじゃん!! 絶対正確な時間なんて決めてねえだろ!!

「…遅いですよ。学園長…。4分の遅刻です」

そう言ったのは一番前の、しかも教壇の真ん前の席に座り、俺達を毛嫌いする生徒会副会長　雨玖　幸之だった。

お、おお……。何だ。雨玖がHRの時間を知ってんなら、単に学が悪いのか……。と思ってしまうくらい雨玖幸之は正しい。どこまでも、いつでも、いつまでも正しく、だからこそ、奴の中の『正しい』とは違う俺達を嫌ってんだろ。多分だが、あいつが一番前の席を選んだのは真面目だからというわけではなく、俺達と顔を合わせたくないから。と俺は思う。

「ゴメンゴメン。…じゃあ、とっとと席つきな〜」

その一言で、まだ立っていたメンバーが手近な席に座る。…やはり、こうしてみるとあれだな。廊下側には必然的に生徒会のメンバーが、そしてベランダ側（つまり俺達側）には三調律のメンバーが目でわかるくらい綺麗に別れた。当然だ。その理由を説明するのが無意味でつてくらい、当然の結果だった。

「…さて。春休みはどうだったかな？　本国に帰った者、何やらキナ臭いことを調べていた者、…そしてろくに仕事もせず家にでぐーたらと怠けていた者。いろいろいるんじゃないかな？」

うつ……。なぜだ？　なぜか妙に心をえぐる台詞だ。…そして、なぜみんなしてこつちを見る！？

「「見るな!!!」」

俺は叫んだ。後ろの姫歌も叫んだ。…考えてみれば確かに姫歌も春休み、怠けてたな。

「はい、見ないであげて〜」

学がそう言う。みんながこっちを見るように仕向けたのはお前だろ
うに!!!

「…諦める、椎名…。美苺 学っていうのはああいう奴なんだ…」

息を潜めた声で隣から結城が言う。

「…ていうか、あいつは何で春休みの俺達の行動を知ってた？」

「…諦める、椎名…。美苺 学っていうのはああいう奴なんだ…」

同じ台詞を続けた結城はどことなく遠い目をしている。なるほど。
『密かに』キナ臭い場所を調べていた結城とつて、春休みに全くコ
ンタクトを取ってない学にその事が知られているのはかなりの大打
撃かも知れない。…諦める、結城…。美苺 学ってのはそういう奴
なんだ…。

「って事でみんなにお知らせ。もう、知ってる人もいるけど、なんと!! 実は!! 本日から!!……転校生が来ます」

周りのみんなは「マジ…?」「転入出来たっけ? ウチ」とまあ当然な反応を見せている。

「はいはい。その子は女の子ですか?」

姫歌が聞いた。学は不適な笑みを浮かべ、

「ふっ…。そう通り…。しかもかなりの可愛い子ちゃんだぜ」

おおと男子の歓喜の声上がる。あのお堅い雨玖でさえ、僅かながら反応を見せている。そりゃそうだ。転校生+可愛い女の子ってきたらそれはさながらフィクション的なことであって決して現実には起こりえないからだ。だから誰しも喜ばすにはいられない。…俺を除いて…。なぜだか、今から来る転校生に対して嫌な予感がするんだ。

「はい。じゃあ入っといで〜」

どこか間延びした声で学が言うと、前扉が静かに開いた。そして、

(……やっぱり……)

俺は心中で呟いた。そこから現れたのは約1時間半前に俺が来栖の不良から助けた女生徒だった。

おおお！！ と男性陣の声が上がった。もちろん、結城も。俺は沈黙。幸い、彼女は俺に気づいてない。だから、せめて今日だけでも関わらずに過ごしたい。

「じゃあ、自己紹介して」

「はい」

だが、俺のそんなはかない願いは叶うはずが無かった。

彼女が黒板に自分の名前を書く。その文字はチョークでは絶対書けないくらい、例えるなら書道のそれに近かった。だが、そんなモノは到底、気にならなかった。なぜなら彼女が黒板に書いた名前

『天神 雪名』

その名前、というよりも姓の部分に皆は動揺を示した。そして一斉に俺達を見る。俺と、姫歌と、美歌を……。

「天…神…」

後ろからは姫歌の驚嘆混じりな声が、周りからは「おい…マジか！？」、「天神って確かあの三人だけのはずじゃ…」という声が聞こえて来る。

そう、俺達の姓は天神…。しかも『あの』天神なんだ…。だからみんなは俺達を見てるんだ。

みんなの視線の先に気づいたららしい転校生　天神　雪名は俺と目が合った。そして、ツカツカと靴を鳴らしながら机の間を歩いてきて、俺の前、正確にはフィアナ隣で立ち止まり…にっこりと……笑った。

(???)

俺の頭の中は疑問符だらけ。それは恐らくクラスみんながそうだろう。

「あ、あの…。俺の顔に何かついてる？」

とりあえず、お決まりの台詞を言ってみる。だが、そんな事お構いなしといったように、彼女は笑みを絶やさず口を開いた。

「みんなの反応をみる限りあなたが、天神 椎名ね…。その前に…」
彼女は畏まり、居住まいを正すと、深々とお辞儀して、

「さっきはありがとうございました」

とお礼を言ってきた。いや、礼を言われるほどの事はしてないし…。

「え、えーと…?」

どうしていいのかわからないでいると、彼女はいきなり上体を起こした。反射的に俺はのけ反る。

「あなたが、椎名なら、何も問題無いわね」

問題? 一体何のことだ?

「って事で!」

そう叫ぶと彼女は俺に右手の人差し指を突き出して来る。更に左手は腰に据えて、更なる言葉を、耳を疑いたくなるような言葉を叫んだ。

「…あなた、私と結婚しなさい!!」

……

……

……はい？

「あの、もう一度言ってもらえる？ ちょっと良く聞こえなかった」

「あら、奇遇ね。私も良く聞こえなかったわ」

俺と美歌がそう言うのと連鎖するかの如く、俺も、私もとみんながみんなが自分の耳を疑い始めた。

「何？ この人達はみんな耳遠いの？ まあ、いいわ。何度でも言っただげる」

彼女は息を大きく吸い、先程と同じポーズを取った。俺はといえば、耳を良くすましている。そして、

「あなた、私と結婚しなさい!!!」

*110 (後書き)

これで一章(第一厄)終了です。こうして改めて読み直してみると、矛盾が多いですね。というところで、しばらくしたら構成もすっかり練って、書き直してみたいと思います。あ、引き続き二章は書いていくので、よろしくお願いします。

第二巻 イレギュラーな存在 1

ガタツ！！

HRが終わった瞬間、俺は席を立ち、教室を後にする。ダツシユで当然、あの女 天神雪名に絡まれたくないからだ。席をたつた瞬間、周りからの視線がきつかったが、それでもなんとか耐え抜き、屋上までやってきた。

「はあ、はあ…。 一体：何なんだ、あの女」

全速力で走ってきたせいでもかなり息があがってるが、そんな事は今の俺にとってどうでもよかった。

「とりあえず、水…」

どうでもよかったが冷静になるためには、少なくともこの後どうすればいいかをきちんと考えるためには、やはり水分が必要だ。てか単にのど渴いたし。そう考えた俺は飲み物を買うことにした。

この学園は校舎がバカでかい分、やはり屋上は広い。そのため、屋上は縦50m、横25mのえらい場所となっている。（最上階までは教室何かが連なってるから、そこまで広く感じない。…だが普通

の学校よりははるかに広いだろうな)

その一画、屋上に出てやや右手斜め前、フェンス腰に設置されている自販機に歩みよる。ポートの部分にブレザーの内ポケットから取り出した認可証をかざし、ピツという機械音がなると、表記されているタッチパネル式のボタンを押す。そこから更にピーという機械音の後にペットボトルに入ったミネラルウォーターが出てくる。そのキャップを開けながら俺は自販機横のベンチに腰を勢いよく落とした。そして、

「…はあああ〜〜…」

深いため息をついた。はつきり言って今後どうするかなんて、皆目見当もつかねえ。いやいや、そもそもの話として、何で俺がこんな事になってる？

「…俺、なにかしたかな？」

うーん…。今日の出来事を振り返ってみるが中々どうして思い浮かばない。飲んでいたミネラルウォーターを横に起き、屋上を見渡してみる。見渡すと言っても、何も無いこのただっ広い空間にいては、いいアイデアなんて思い浮かばずなんてない。

ふと、下の階へと続くドアに目をやる。(ここから直線距離で20mくらいか)俺もそこから来た。さっきのうちに誰も入って来れないように鍵をかけ…。ようと思ったが、屋上のドアには鍵なんてついてない。だから壊した。ドアノブごと。近くにあった古いパイプイスで。今にして思えばこれって…。

「誰も入って来れないけど俺も出ていけないよな」

アホだ…。完全無欠のアホだ…。

「…まあいいや。そのうち誰かが直しに来るだろ。今は平穩なこの一時を……」

「平穩な一時って何？ この後のあなたには何が待ってるの？」

「ッ！？」

そんな俺の不意をついたのはいつの間にか俺のすぐ隣、【肩がつく零距离】で座っている転校生 天神 雪名だった。

「あ、天神！？」

反射的に立ち上がり、一步後退りながら、彼女を見た。

「雪名でいいよ。他の人を自分の名字で呼ぶのって嫌でしょ？」

「あ、ああ…。それじゃ遠慮なく…。ってそうじゃなくて！！」

俺が聞きたいのはいつの間にか俺の隣にいたんだって事だ。…いや、

そんな芸当ができる存在なんてたかが知れてる。

「…やっぱり雪名も持つてるんだな？ なにかしらの力を…」

「あ、早速『雪名』って読んでくれるんだ。ありがと、マイダーリン！」

「え？ ああ、そりやどうも…。ってそうじゃなくて！！ てか誰がダーリンだ！」

「まあまあ。とりあえず座りなよ。ほら」

自分の隣をポンポンと叩いて座るように促す雪名を俺は無視して、ベンチの隅に座る。真ん中辺りに座っている雪名は一瞬むすつとし、改めて俺の隣に寄ってきた。…零距离位置に。

(…せっかく一番離れたところに座ったのに)

内心、そうぼやきながら、俺はこの状況が非常にマズイという事に気がついた。大和撫子な雪名と屋上のベンチで二人きり。ドアは壊れ、誰も入ってこれない。…さらにどさくさに紛れて自分の腕を俺の腕に絡めてくる雪名。はっきり言うならこんな状況、男子なら願ったり叶ったりのシチュエーションだろう。

「私に聞きたいこと、いろいろあるだろうけど先に一つ、質問していい？」

「あ、ああ……」

「神様っていると思う？」

いきなり脈絡のないことを言う雪名。…たまにいるんだよな。そんなアホみたいな質問する奴…。俺はだるさ半分、めんどくささ半分でいつもの答えを言ってる。

「さあてな…。いるかもしれないし、いないかもしれない。ていうか、いるかもしれないのにいないなんて言えないだろ？ していないかもしれないのにいるなんて言えない。そこまで割り切って断言するほど俺は自信家じゃないよ」

そつだ。自分の目で神様を見たわけでもないのに、そう安々と『いる』なんて言えない。だから俺はそんな質問にはこういう風に答えてきた。

「じゃあ、今、目の前に神様がいるなら信じる？」

「そりゃそつだ。自分の目で見たものは信じるよ、俺は。そつじゃないとこの学園には信じられないものが多すぎる」

「じゃあ、…はー…」

そう言って雪名は、自分の顔を自分の右手人差し指で指してくる。

「何？ なんかついてんの？」

そう思った俺は雪名の顔を見るが、別段、至って普通だ。てか可愛いな、ちくしょう。

「なんだ、なにもついてないぞ」

「神様」

は？ と思う。何いきなり神様って。

「だから神様」

続けて言う雪名はめちゃくちゃ笑顔だ。右手は未だに自分を指している。えーと…。つまりこりゃあれだ。こいつは自分が…

「…自分が神様って言いたいのか？」

「…」明察！…」

「はいはい。寝言は寝て言おうね、雪名ちゃん」

「あゝ！ 目の前に神様いたら信じるとか言って信じないじゃん！
！ 嘘つき！…」

そりゃそうだろう。いきなり自分が神だ!! とかいう奴の話信じるはずがない。俺がさつきいつた信じるは、その目の前に現れた神様とやらが、神的な力を見せてくれたらの話で……

「…じゃあ、見せればいい？」

「え!？」

「今から神的な力を見せたら信じてくれる？」

「あ、ああ……」

「わかった!!」

そう言っただけで彼女は立ち上がる。…一瞬、考えを読まれたのかと思っただけ、次に目にする光景にそんな思いは掻き消される。

雪名は向き直り、俺と目があつた。そして、

「……」

口元で何かを呟いた。その次の瞬間だ。驚愕するのは…。雪名の漆黒の双眸が色を変えていく。鮮やかな紅蓮へと…。鮮やか過ぎて鮮血なのではと疑うほどだ…。

「…いくよ」

雪名がそう吹き、左手を上げた。その上げた手を胸のうちに交錯させるように右耳の方まで持って来る。そこからどうする？　と思っただ時だった…。

バンツ！！ ……ズササアアー！！

ドアが開いた。ていうか吹き飛んだ。吹き飛んだ後、地面を滑るようにして、俺達の近くに流れてくる。そのドアを見てみると、鉄製のなにに見事なまでの靴あとがついていた。…俺はこれをやった奴を知っている。

だから俺は恐る恐る、ドアがあった場所を見た。　　姫歌だった。
…やっぱり。

「…新学期早々…何やってるの？　お兄ちゃん…」

俯きながら言う姫歌はまるでユラユラという音が聞こえそうな足取りでこちらに向かってきた。

この時、俺は気づく。屋上に誰も来てほしくなかったのならドアノブを壊す程度じゃ全然、意味がないと…。　ていうか、何で逃げ道のない屋上に来たんだろうな、俺…。

この光景を前に俺は一体、どうすればいいんだろうか…。

姫歌と雪名が対峙している。…何やってんだよと突っ込みたいがそういう空気じゃない…。

「何？ 私の椎名に何か用？」

「……………」

（私の椎名って何？）

内心、そうばやきながら姫歌をみた。雪名の問いに対し、ずっと黙っている。…まずい。無言の時の、そしてあの俯いた感じの立ち振る舞いは明らかに怒ってる時の姫歌だ…。

「お、おい、姫歌？」

俺は姫歌に駆け寄る。その怒りのボルテージをあげさせないために諭しに入ったのだ。肩に手を置き、片膝をつく。自然と顔を覗き込む形になった。姫歌の目はもう、まずいなんて言っただけじゃない。も…のすこくまずい！！…なんて言うのかな。目がね、病んでるんだ…。俺はこんな姫歌を過去に一度しか見たことがない。

「…椎名はどいてて」

ああ、そうだ…。こつやつて呼び名が何度も変わるの、怒ってる時の姫歌が情緒不安定になるからだ。と、ミーナが言っていたな。当然です。そんなの俺がわかるわけがない。

「え？ あ、ちょっと、姫歌さん!？」

そんな俺を無視して姫歌は数歩、歩み寄る。もちろん雪名に…。俺の眼前には姫歌が立っていて、その俺と姫歌の直線上に雪名がいる。…で？ 一体、この二人は何しようとしてんですかね？

「雪名さん……だっけ？ この学園に何しにきたの？」

おいおい…。あんなに転校生に胸を踊らせていたお前がそれを言うか？

「何しに…。そりゃあ、あなたたちに会いによ。強いて言えば《天神》のあなたたちに頼み事をしにきたのよ」

「…その頼みって？」

「…落とし物の搜索願い？」

…ふざけてる。そんな事の為にわざわざ転校して来たのか？…ていうか、やつちまったな、雪名よ。今の姫歌に対してそんな解答は火に油だ。いや、もう火にガソリンだ！！ まあ、おそらく雪名にとっては姫歌が何故怒ってるのか、ましてや怒ってるって事自体に気づいてないんじゃないか？…因みに何故怒ってるのかについては俺も知らん。

「…ふん、じゃあ今ここで、あなたをミンチにすれば私たちはそんな余計な頼み事、聞かずにすむわけだ？ ていうかもう聞いちゃったんだけどね、エヘッ！」

「…もしかして、怒ってる？」

ようやく気づいたのか、雪名…。やはり俺が思った通りだった。って、感心してる場合じゃなくて！！今、姫歌さんはあなたをミンチにするって言ったんですよ！？

「怒ってないよ、ただムカつくだけ。だから潰す。潰して、引き延ばして、さらに潰して『これ豚の挽き肉なんだけど、どう？』って近所の主婦のおばちゃんに売る。100g50円で。ていうか実際に雌豚だし」

よりタチが悪い！！　そして安いな、その肉！！いやいや、まで。
何不適に微笑んでんだ、雪名。

「…何それ？　つまり私にケンカ売ってんのね？　……上等！！
なら、そのケンカ、かってあげるわ！！」

おいおい、戦る気か？　あの『震撼妖姫』姫歌と？　むりだろ。

「ちょ、ちよつとまてつて！」

だから俺は二人の間に入ろうとする。止めるために。だが、それは入ろうとしただけで、すぐにやめた。そうしようとした瞬間、姫歌が駆け出したのだ。

身を低く屈めながら、雪名に駆けていく姫歌。そんな彼女を前に雪名は微動だにしない。姫歌が勢いよく殴りかかった。その小さく強大な破壊力を持つ拳をまともに受けたら、おそらく、ただじゃ済まない。その拳が雪名の顔を捕らえた。完璧だ。確実に当たる、そう思えた。しかし、姫歌の拳は空を切った。空回り、という表現が一番いいのかも知れない。

「…ッ！？」

一番驚いてるのはやはり姫歌だ。…後ずさったのだ、雪名は。ギリギリまで何もせず、攻撃が当たる瞬間に一步だけ。姫歌も数歩、後ずさる。二人の距離が少しだが開いた。

「全く…。あんた、何も分かってないわね。…力…ってのはただヤミクモにふるうだけじゃ意味ないのよ？ そんなんじゃ、ミンチにする価値すらないじゃない」

…雪名がそう言った直後、俺の後ろ、つまりは下の階へと続く扉はもうないんだけど　　の方から足音が聞こえた。もちろん気になったので振り返ってみる。　　美歌だった。上がって来るなり、訝しげな表情で姫歌達を見た。そんな彼女達は美歌に気づいた様子はない。

「…あの二人、何してるの？」

「女と女の戦い…かな」

「ふーん…。まあいいわ。それより椎名君、学園長から伝言よ。至急、学園長室に來いだって」

「…俺だけ？」

「いいえ、委員長と副委員長の人達全員。後のメンバーは既に入學式の警備にあたってもらってる」

よかった。学園長室に一人で行くのはいやだからな。ていうか、一人で学園長に会いに行くのがいやだからな。

「…じゃあ、いくか。なんかここ、疲れるし」

そう行って、俺は学園長室に向かった。こんなとこに居たくなかったからか、足がスルスルと階段の方へと向かう。

後ろで「雪名さんも連れて来いって言われたんだけど！」と叫ぶ美歌を無視して進む…。だって、もう余り絡みたくないからな、雪名とは。…うん、まあ無理なんだけどね

学園長室。相も変わらず、派手な装飾で彩られている。故に見所が余りないのが特徴だ。あるだろ？ 目立ち過ぎて逆に目立たない。そういう感じだ。

「それで？ どうしたんですか、学さん」

俺達は今、そんな学園長室に来ている。来客用のソファに座り、呼ばれた理由を問いかけた。

……因みにこのソファは三人までしか座れないため、中心に俺、右に雪名、左に姫歌と、端から見れば両手に花という感じだが、テーブルを挟んだ向かい側にある同型のソファ（向こうの席は美歌が中心。俺から見て右に結城。左側にフィアナが座っている）に腰掛けている美歌がひたすら俺の方を見ている。……笑顔で。目が笑っていない方の笑顔で。こういう笑顔は美歌が怒っている時意外に見たことがない。

だから、俺は恐怖心から両手に花なんて思考はこれっぽっちも浮かばなかった。さらに両サイドの二人は睨み合ってるしね。

……ていうか、なんで美歌は、怒っているんだうか。全く心辺りが

ない。美歌の隣りに座っているフィアナもどこか面白くなさそうな面持ちだ。……結城だけが、なぜか必死に笑いを堪えてるのが気に障る。おそらく美歌が俺に対して怒ってる理由を知っているに違いない。後で問い詰めてみよう。ていうか、お前は委員長でも副委員長でもないだろ、なんでここに居るんだよ。

「いや、君達を呼んだのはちょっとした問題があつてね」

学は学園長が座る専用の椅子に座り、机上に頬杖をつきながら俺の問いへと答え始めた。

「……問題、ですか？」

「うん、僕もさっき知ったんだけどね……」

「学さん、それは俺から話させてもらいますよ」

そう水を差すように言ったのは結城だった。今まで笑いを堪えていたのに、すぐに真剣な顔になった。そんな結城に俺は器用な奴だなと思いつつ、黙って話を聞くことにした。学も無言で肯定する。

「椎名、俺はお前が教室から出て言った後、部室へと向かった。理由はフィアナ達から聞いたお前がやり残した委員会の仕事を片す為

だ

……わずかに俺を皮肉るそのセリフにちょっとイラッとくるも、悪いのは俺だから言い返せない。

結城は一呼吸おいて続けた。

「……が、委員会の端末に一通のメールが入っていた」

「そのメールの内容は？」

「いや、別に見てないけど？」

「はあ!？」

「うそうそ。……因みにメールは音無先輩からだ」

『ええ?』

学と雪名、結城以外の奴が驚嘆の声を上げた。

音無 音色。俺が諜報の委員長になる前の委員長……まあ、前任だな。そして諜報の創設者である。因みに女だ。彼女は名の通り音がなかった。心臓の音、足音、呼吸音にいたる日常生活に置けるほとんどの『音』を発しなかった。声以外は。そしてその声は下の名前にふさわしい『音』を奏でるような声だった。まあ、それでも

おしゃべりというわけではなく基本はやはり無口。故に一番静かな人だった為、『諜報』という部門においては彼女の右に出るものはいない。そんな彼女は今年の2月に行われた卒業式が終わると同時に行方を眩ませた。まさに音沙汰がなかったわけだが、その問題も今、解消された。

『そ、そのメールにはなんて!?!』

俺、美歌、姫歌、フィアナは一字一句、変わらずにハモった。

「おいおい、おまえら。さっきも言ったがこれは『問題』だ。いわゆる異常事態なんだぞ？ 喜ぶなよ……。まあ、最初は俺も喜んじまったが」

おい、そんな大事な事がかかれてるのに、お前はさっき、必死で笑いを堪えたり、冗談を言ったりしてたのか。余裕だな。

「……まあ、メールの内容を聞けばいやがおうでも驚くさ」

そう言って、結城はブレザーから何やら紙を取り出した。どうやらそのメールをプリントアウトしてきたようだ。そのプリントを俺に向かつて差し出して来る。読み上げるとのことらしい。

「ええーと……。『この手紙を三調律の誰かが見ているという事を強く願う。……。三調律か。懐かしい響きだ。ほんの二月、口にしてないだけで、こつも感傷的になるとはな……。最も、私が二年、天神君たちが一年生の頃までは、風紀委員長が赤嶺で懲罰にいたってはまだ存在していなかったわけなのだが、そんな短い期間でそこまでの協力体制を結べた事に我ながら誇りに思つよ』」

そこでみんなは苦笑する。先輩の文面は相変わらずで、普段の口調と明らかに違う。俺は続きを読む。

「『さて、長い前置きはさておき、本題に入らせてもらおう。……。もし、そこに天神妹がいるなら、しかと覚悟しろ』」

姫歌は一瞬、「ええ!？」となつたが、すぐに意を決したようで、俺に続きを促した。俺は頷き、更に読み進めていく。

「『さつき言つた前任の風紀委員長、赤嶺だが、学収にしているのは知つてるな?』」

学収 正式には学徒収容所。名の通り学生を収容する施設だ。スクール・ゴーストとも呼ばれ、日本の領海線ギリギリに位置し、なおかつ、海底に位置する事から絶対に脱獄できないと言われている。

「『その赤嶺が 脱獄した』」

『なっ!?!』

俺達はみんな驚愕した。メールを呼んでいた俺でさえ、だ。姫歌は気が気じゃない位に動揺している。なるほど、音無さんが言っていたのは姫歌がこうなると知っていたからだろう。それほどまでに赤嶺という人物は危険なんだ……。続きを読む。

「『問題はここからだ。赤嶺と共に脱獄した奴が他に二人いる。そいつらのデータを付属のファイルに貼っておく』」

そこまで読み上げるのをまっていたかのように結城が一枚の紙を取り出す。どうやらそのファイルもプリントアウトしてきたようだ。折り畳まれたその紙を開いて目の前のテーブルにおく。

「なっ!?!」

俺は驚愕せざるを得なかった。そこには二人の顔写真があった。顔が些かごつい男と、眼鏡をかけた男だ。

その二人はさっき雪名に絡んでいた奴らに間違いなかった。

「……アクセス」

単調な声で俺はそう呟いた。その声に反応して、メインプログラムが起動音と共に立ち上がる。

『声紋認識 完了。諜報委員、天神椎名のコードを起動 修正。
メインプログラムを起動します』

立ち上がりと同時に視界正面にある巨大なモニターが青白く光る。やがて普通のパソコンよりは高性能なスタート画面が現れる。……まあ、声紋認識なんて機能がついてる辺り、もう普通のパソコンではないよな。

「へえ」。ちゃんと管理されてるのね」

雪名が言った通り、委員会本部（三調律の）であるこの場所はきちんと情報を管理するために現代科学の最先端のセキュリティをもっている。……らしい。っていうのは俺があまりそういう分野に知識がないからだ。でも、入室するのに声紋、指紋、網膜、それと認証。これらをいちいち確認するわけだから（しかも学校だぞ？）初

心者さながらの俺からすれば、これが高性能じゃなければ何なんだと聞きたい。

「まあ、俺達はいろんなとこの情報を集めてるからな。それなりのセキュリティ完備がないとダメなのさ」

結城はさも当たり前、そして誇らしげに言った。それを聞いた雪名は、

「なるほどね……。で、あなた誰？」

と言った。結城は以外とデリケートな奴だ。だから多少は落ち込む。……そう思ったんだが……。

「おいおい、今まで一緒にいたじゃないか。オレだよ、オレオレ」

「……うるさいわね。ちょっと黙りなさいよ」

「……」

そんな結城を黙らせたのは姫歌だった。正面の巨大モニターといくつも連動している小型のディスプレイのうち、最も手じかにあるものを見ている。姫歌は大きすぎる画面は何かと疲れるらしく、いつ

も小型のそれを見ている。姫歌はキーボードを操りながら呟いた。

「……………開くわよ」

瞬間、モニターには低い動作音と共に一つのデータが浮かび上がった。

俺達がここに来たのは他でもない。音無さんから送られてきた付属のファイルを見るためだ。顔写真こそ見ることはできたが、詳細なデータはメインプログラムに『俺』がアクセスしないと開けないんだと……………。何でだよとは思うがそれが委員長の役目なんだろ。ていうか、だったら最初から学園長室じゃなくてここに呼べよとは思うが、「椎名を呼んだら転校生さんも来るんだろうな」と思ったらしい。それこそ何でだよと言いたいかなぜか納得しちゃった俺がいるから言わないでおく。因みにさっきも言ったがここに入るには指紋なんかを通さないといけない。だが今日転入してきた雪名のそれらが、このセキュリティプログラムに登録されているわけもな……………。(だからこそ、結城は俺達を学園長室に呼んだんだ)しかし、雪名はここに居る。それは雪名のデータがプログラムに登録されたことを意味する。ていうかさっきしてきました……………コレだけのセキュリティ完備だ。登録するには相当な時間を要する。故に、俺達は入学式の準備作業を免除……………いやもう、既に入学式始まっています。そしてフィアナは入学式に戻りました。

画面上に浮かんだそのデータを姫歌は開いた。どうやらもう、雪名に対しては怒ってないみたいだな。いや、せめて怒りは収まった、という感じが。

「……それで？ この二人の事知ってるんでしょ？」

「ああ。俺が認証を取りに帰って再登校したとき、建設途中だったデパートの前にある空地。そこで雪名に絡んでたんだよ。ええーと、「認証を出せ」的な？」

そこで雪名を見ると無言の肯定を示していた。姫歌に向き直ると「なんで名前と呼んでんのよ」と俺を一瞥してきたが、無視した。

「姫歌ちゃん。ファイルを開いて」

美歌が促すと、姫歌は無言でディスプレイに向き直り、画面のデータに触れる。再び、低い動作音がなり響き、二人の顔写真が現れる。

「まずはこいつね」

そういつて顔が些かごつい男の写真をタッチする。すると、その写真は一気に縮小し、画面左上へ。そこから連なるように文字が浮か

び上がった。

『轟木 大翔』

とつらみだいに

14歳の頃、片親だった母と兄、妹の三人を素手で殴り殺している。現場となった彼の実家は駆け付けけた警察らによると彼はリビングの中央で佇んでおり、家族の死体は彼の回りに無造作に横たわっていたらしい。いずれも頭部が吹き飛んでいたと証言されている。殴り殺した、については彼がそう宣告した事もあるが、何より犯行に使われた凶器が不明だったため、その言葉を鵜呑みするしかなかったようだ。因みに警察に通報したのは彼自身で、連行されるときも無抵抗だったらしい』

内容は音無さんらしく、簡潔にまとめられていた。本来ならおそらくはもっと莫大なデータがあるんだろうが、それらを要点だけまとめくる。さすがというべきか。

「近親殺しか……。なかなかどうしてメジャーなケースだな。だが、殴って殺すつてのは聞いた事ないな。どう思う？ 椎名」

文を読み終えたらしく、結城は俺に問い掛けてきた。

「殴って殺す…….についてはひとまず置いて置こう。問題は『警察に通報したのは彼自身で、連行されるときも無抵抗だった』の部分だな。そこまでしといて何故今頃脱獄してんだよ!? と突っ込ん

でみたいが、何か理由があるかもしれない。眼鏡野郎のも見てから判断しよう」

それを聞いた姫歌は無言で頷き、指を操作して前の画面へともどる。そして眼鏡野郎の写真をタッチすると、さっきと同じ要領で文章が現れた。

『淡津 恵太あわつけいた』

過去に所属していた学校の同学年を学年集会時に一人残らず殺害している。凶器はナイフ』

「え？ 終わり？」

そう尋ねると、姫歌は一生懸命、画面を下にスクロールしようとするが、どうやら続きはないらしい。

「……っか、名前普通だな。それで？何か思うところは？」

相も変わらず、結城がたずねてくるので、俺は答えてやる。

「…………別に」

それが俺の頭で出せる最大級の答えだ。ていうか名前をせめてやるなよ。

「全く…………。さっきこいつらに会ったんだったら、何か他に情報ないわけ？」

と明らかに皮肉めいた言葉が姫歌から聞こえて来たが、無視した。…………のだが、無視できなかった奴がここに一人。

「…………それ、私の事言ってるの？」

雪名だ。何故だ…………。無視しろよ。流せよ。そして、口論が始まる。

「え？ 何？ あの二人ってもう修羅場なの？」

どこか面白い物でも見たように結城は俺と彼女らを交互に見て、目を輝かせている。よし、この場はこいつに任せて、俺と美歌は入学生式に参加しよう。

「美歌、式に戻ろう」

「え？ でも……」

「大丈夫。姫歌達は結城に任せるから」

「いや、でも……」

やはりというか口ごもる美歌の腕を俺は引っ張り、出入口の方へと向かう。すると美歌は「あ……」と顔を赤くした。結城は「ん？ どこ行くんだ？」と姫歌達の方を見たまま、後ろの俺へと聞いてくる。顔は恐らく、笑っているんだろう。その問い掛けには多少なりとも笑いの声が含まれている。

「トイレ」と一言言ってから俺と美歌は委員会本部を後にした。内心「スマン」と誤りながら。

俺と美歌、姫歌は既に帰路についている。二人はもう疲れたらしく、髪を既に本来の長髪に戻し、美歌は俺の左横を歩く。姫歌はといえば、俺におぶられ、眠っている。未成熟な体とはいえ、やはりあるものはあるらしくさつきから俺の背中には柔らかい何か当たっている。こんな事を考えるって事は姫歌に対して少なからず、異性としての好意を抱いているのだと自覚するが、それが義理とはいえ妹という枠組に当てはまるなら見事なまでに『シスコン』というワードが当てはまる。……姫歌は美歌と双子だ。しかし、体が追いついてないせいとか、姫歌の顔は【三年くらい前の美歌と双子】なのだ。つまり、美歌を多少なりとも幼くした顔、ということを意味する。さながらその特徴は、寝ている時に最も強く現れる。それが一番自然な顔だからな。もし、妹という枠組がないとしてもそこには『ロリコン』という新たなワードが組み込まれる。はっきりに言う。

109

……そんなのはいやだ！！　ロリコンと呼ばれるのはいやだ！！　なら、シスコンはいいのか、と言われればそうじゃないが、既にミーナにはシスコンと呼ばれてるから半ば諦めてる。

という事でそれまでの思考をストップ。姫歌に余計な感情を抱く前に今日会った出来事を振り返ることにする。

あの後、入学式の警備を任せっきりだったフィアナと合流し、俺と美歌も警備に参加したのだが、結局、例年の『入学式の狂気』とやらは起きなかった。

「入学式の狂気、ねえ……。別れ際に結城君がそんな事言っただけ、結局なにも起きなかったわね」

「ああ……。だが、起きないなら起きないでよかったというべきだろ。それより重要なのは赤嶺の件だ。あれからもう一年たつのに、何故、今になって脱獄したのか……。そして何故、そう安々と脱獄できたのか……。そこら辺を探る必要があるな。帰ったらミーナに連絡してみようと思う」

「そうね」と美歌は同意してくれた。さっきまでの考えがなかったかのように、パパツと今後の方針が決まるので、俺は一人、心の中で安堵のため息をはく。

美歌とそうこう話している間に家についた。せいぜい5、6時間帰ってないだけなのになぜだろう。なんかとても懐かしく感じる。それだけ、今日という日が長く、故にとても疲れたという証だろう。入学式の心配から、転入生、妙なクラス替えに、はたまた赤嶺の件……。

(……………ん?)

ふと、疑問に思う。そういえば雪名は？ と。結城によればあの後勝手に出て行ったらしいが……。 (姫歌はその直後に本部のソファで眠ったみたいだ)

その事を美歌にも聞いて見ることにした。

「なあ」

美歌は「ん？」と適当にかえしながら鍵を開ける。そしてゆっくりとドアを開けて、中へと入っていく。

「雪名の事なんだけど……」

そう言いながら俺は美歌より右斜め後ろから後に続くこととする。……が、半身までドアの内に収まっていた体を美歌は半ばなにかに引き戻されたように、あるいは正面から何かに突き飛ばされたかのようになり再び全身を外に出し、そして勢いよくドアを閉めた。

その不意にも勝る行動に俺はのけ反る。姫歌もろとも転びそうになるが、何とかこらえる。

「……ねえ、椎名君。その雪名さんのこと、家に呼んでないわよね？」

「は？」

呆気に囚われてる俺をよそに美歌は続けた。

「いや、そんな筈はないわ。……うん、きっと私の見間違いよ。……
…そうするとなじと見間違えたのか逆に気になるわね。幽霊？」

「……あの、美歌さん？」

一人ごちる美歌に声をかけるも、応答はなく、変わりにもう一度ドアを開けて中を見る。さっきよりも小さく開いたドアだったが、再び勢いよく閉められた。その時に響く音はさっきの倍以上。

「や、やっぱりいる……」

そうつぶやいた美歌はわななくように玄関先の段差ギリギリまで後ずさった。

「まずはドアに謝れよ、可哀相だろ」と言ってやりたかったが、ここまでうるたえる美歌を俺は見たことがないかもしれない。だから、逆に「そんなのあなたのキャラじゃないですよ」となだめてやりた

いくらいだ。……別になだめはしないが。

……一体、玄関先に何かあるというのか。まあ、美歌が入らないなら俺が先に入ろう。そう思い、左手に姫歌のおしりを乗せて、全体重を片手で支える。前屈みになり、より姫歌の体を支えるような感じになった所で、空いた右手をドアノブにかけ、開いていく。

全開にした後、右足で開いたドアが流れて来るのを防ぐ。そこまではよかった。そこまでは姫歌を抱える身として支えるように下を見ていたわけだから。

姫歌を両手でしっかりと支えた後、顔を上げる。すると嫌でも目にする。

さつき、美歌に彼女の事を聞こうと思っていたのだ。彼女 天神
雪名の事を。

雪名は玄関を上がったフローリングの上に、腕を組み、仁王立ちで居住まいを正している。そして一言、叫んだ。

「おそいつ……!」

「…………ええええええ……………」

俺もまた、そつうなだれずにはいられなかった。

「私、ここに住むから。あ、このコーヒー美味しい」

雪名がそう言ったのは我が家のリビングでの事だった。姫歌を自室のベッドで寝かした後、普段食事をする四人座りのテーブル。その椅子に俺、隣に美歌、正面には雪名が座っている。美歌が入れたコーヒーに賞賛しながら続けた。

「許可はもうとったから」

「誰のだよ」

「家主の」

「親父の？ そっか。なら仕方ないか」

「そうよ。もう仕方のない事なのよ」

「よし、じゃあミーナに電話を……」

そこで話を終わらそうとした俺。だが、隣の美歌はそう甘くはなかった。

「ちょっと椎名君……?」

「……はい」

美歌の顔を見ずに俺は答える。たぶん、いや確実に怒ってる。この文末がトーンダウンする感じ。まさしく怒ってる時の美歌の声に間違いはない。つまりは美歌の中でこの問題は解決していないというわけだ。だから俺は、俺の中では既に終わった問題をもう一度、掘り返す事にした。

「あゝ、えーと。雪名、何故ここに住みたいのか、それを聞かせてくれ」

「なにいつてるの。私達は恋人同士なのよ? 一緒に住むのは当然じゃない」

「当然じゃねえよ!!」

いかん。思わず突っ込んでしまった。しかし、雪名はなぜか笑顔で、

「ふう〜ん。恋人同士ってところは否定しないんだね」

とかえしてくる。俺は当然「あ……」とやっちまった感に囚われた。

バンッ！！

美歌が机を思いっきり叩く。そして俯いていた頭を持ち上げて、

「もう怒った！！ 怒りました！！！ 家主の許可は得たですって！？ 父が海外赴任でいない今は私が家主よ！！ そもそもあなたが父の連絡先をわかるはずがないんです！！ だってあの人、ケータイもってないし。そんな人から許可なんてとれるわけないでしょ！！！！」

「……バレたか」

「認めやがった……。ていうか落ち着けよ、美歌」

そんな俺を無視し、美歌は立ち上がった。それを見た雪名も「お？ 何だ、やんのか」とでもいうように立ち上がり椅子から離れる。

俺達から遠ざかった雪名は玄関先でのポーズ 腕を組み、仁王立ち をとった。そして、「先手は譲るわ」と余裕の笑みを浮かべた。……だが、その考えは間違いだ。だから俺は警告してやる。

「気をつけるよ、雪名。先手をとった美歌には抗いようがないぞ」

ほづける雪名だったが、もう遅かった。美歌がその口を開いた。

「…………平伏しなさい。さすればあなたを『赦します』から」

瞬間、雪名は「あ…………ッ！」と短く悲鳴をあげる。そのまま、崩れ落ちるように膝からガクツと倒れ俯せになった。雪名の背中に触れてる空気はどこかモヤがかってみえる。

重圧。

そついう言葉が一番しっくりくるだろう。しかし、美歌の持っている能力ってのはそんな陳腐な言葉じゃない。

「…………『事象に対する命令』か」

雪名がそう呟いた。それを聞いた美歌はクスリと笑う。…………怖つ…………。

「ええ、その通り。過去でも未来でも起こった、あるいは起こりうる事象に命令する事ができる。この場合、先手を譲るというあなたの言葉に対し『先に私が起こす行動』という事象に命令を与えた。それがこれ」

長い説明を言い終えた美歌は雪名を指差した。つまりそれほど余裕

があるという事だ。……しかし雪名はまるで、何でもなかったかのように
立ち上がったのだ。その瞳は僅かながらに紅い。

それをみた美歌は「…うそ」と声を漏らす。

「なるほど、ね……。《内神》が主、天神美歌か。身の内には《傲慢》の大罪神。さしずめ姫歌ちゃんの内には《嫉妬》と《憤怒》の大罪神。けど、寝ちゃってたって事は相当な体力を使うみたいね」

「……ッ!」

美歌は驚いた顔をしているのだろう。横に立っているからわからないが。だが、俺にとってそんな事はどうでもいい。……実際の所、どうでもよくはないが、正直めんどくさいから「な、何故それを知っている!？」などというバカらしい中二病発言はやめておく。知られてるなら知られてるでもうどうしようもないのだから。

「ていうかひどいね、椎名君。人に気をつけるなんて言うておいて、助けることも、まして慌てる事もしないなんて」

……確かにそうだ。見た目が弱そうな少女が美歌の能力で押し潰されそうなのを俺は端から見ているに過ぎない。もちろん、美歌を止めようと思えば止められた。隣に立ってる美歌が『命令』出来ない

よじに口を手で塞げばいいわけだからな。

「……ごめんなさい」

素直に謝っておこう。これは本音だ。さすがにやりすぎた感がある。

「まあいいけどな。……それで？ 私の能力、わかった？」

「……ん？」

「だから、私の能力。……まさかまだわからないの？ 今で3、いや4回は見たはずなのに？」

……俺がさつき美歌を止めなかった理由はそこにある。雪名の能力が何なのかはつきりさせるためだ。

「……多分だが……お前は空気を操るんだな？」

「1」明察！」

ビシッ！ と指を突き付けながらいう雪名。どうやら当たったらしい。そんな彼女には今も強力な重圧がかかっているはずだが、なるほ

ど。おそらく彼女は自分の周りに空気の壁を作って重圧を遮断しているのだろう。美歌もなるほどと呟いた。

「美歌。もうやめろ」

コクンと頷く。どうやら頭は冷静になったらしいな。そして、右手を横にシュッとスライドさせると、雪名の周りにあったモヤが消えた。

「雪名さん……。その、ごめんなさい！ 私ったら、つい……」

謝る美歌。つい、がこのレベルなら普通の奴なら明らかに死んでるな。

「うっん。むしろ謝るのは私のほうよ」

「なんだ？ 何か悪いことしたのか雪名」

確かに破天荒な発言はあったがそれを除けば雪名は別段、謝るようなことはしていないように思える。むしろことごとく雪名に突っ掛かる姫歌と美歌、微妙に俺の方が謝るべきだとおもっただが。

「……どうやら二人とも気づいてないみたいだから言うけど、私が今までとった行動は全部姫歌ちゃんと美歌さんを怒らせるためよ。」

そうすることで、『大罪』がどれほどな物か見てみたかったの。だから……」「めんなさい」

深々と頭を下げる雪名に対し、

「あ……」

と息を呑む美歌。どうやら雪名の言葉は理解できたらしい。だが、俺はそれを聞いてもイマイチ理解しがたい。雪名の行動が美歌達怒らせる？ なに言ってたんだ。

まあ、本人が謝りたいと言うのなら別にそれを止める権利は俺には無いので、話を先へ進めることにした。

もっともな疑問を俺は雪名へと問いかける。

「……そうする理由はなんだ？ 大罪を使って何をするつもりだ？」

「何をするって……。別になにもしないわよ。ただ、お願いしたいのよ。……【落とし物】を探す手伝いを」

その言葉を聞いた時、

そういえば

と思い出す。屋上で姫歌に学園に来た理由を聞かれた時、雪名は「
《天神》のあなたたちに落とし物の捜索願いをしに来た」的なことを
言っていた。この状況で再びそれをお願いするという事はその言
葉はあながち、冗談ではなく、むしろ本気で言っているのだからと
俺は思った。

雪名のお願いについて詳しいことは明日、改めて聞くことになった。というのも姫歌がいらないと意味がない、との事らしい。

その後、美歌は雪名がこの家に住むことをあっさりと認めた。

軽ツ!! と思ったが、それが美歌なのだ。冷静になれば、彼女ほど聞き入れのいい人はいないだろうと俺は思う。

しかし、この家には空き部屋が無いので、雪名はしばらく美歌の部屋で寝泊まりすることになった。……なんとも打ち解けるのが早いお二方だ。

そして晩飯を食べ、その後に風呂に入り、(ちなみに雪名と美歌は二人で風呂にはいった。雪名は美歌のライムグリーンのパジャマを着ている) 適当な話をする。そうしている間も笑いあったり雪名と美歌はまるでホントの姉妹のように違和感がなかった。……するとそこに姫歌がいなかったことが俺にとっては何よりも違和感だったが、二人が寝ようとする今になってまで起きて来ないのだから仕方がない。

「じゃあ、私たちは寝ようかな」

「椎名君は寝ないの〜?」

寝ぼけまなこで美歌が聞いてくる。

「俺はもうちよい起きとくよ」

別段やることはない。時間も既に12時をまわっている。いつもならもう眠ってる時間だ。しかも今日は色々あったため、春休みでだらけきっていた身体には相当答えたはずだ。だが、眠気なんて無い。今の俺は美歌と雪名を見ているだけで、無性にドキドキしているのだ。……性的な意味で、というわけではない。二人はもう端から見れば仲睦まじくみえるが、もちろん俺にもそう見える。いつまた、さっきのように戦り合うかわかったもんじゃない。そこにドキドキしてるんだ。すでに雪名の能力を把握するなんて目的は達成したため(その目的も後から聞いた話、俺を試すためにわざと美歌の攻撃を受けたんだとか)、今度戦り合ったら俺は確実に美歌を止めに入らないといけない。無論、雪名にそんな気遣いは無用だと思うが、まあ人として、ね?

「そう……。じゃまた明日」

間延びした声でリビングを後にする。雪名も美歌の後を追ってリビングを出て行った。俺は二人に適当に返してから二人の足音が完全に消えるのを待つ。……そしてリビングが、一階が完全に静まり返

ったのを耳を澄まして確認した後、

「……はあああああ……」

深いため息をはいた。当然だ。雪名達が和睦してから6時間強。気が休まるときなんてなかったからな。

「やべえ、一気に疲れが……。ていうか、そもそも姫歌は雪名がここに住むって知らないわけだよな……」

明日の朝、姫歌と雪名が出くわした時の光景を思い浮かべると、どうにもやりきれない。

「……俺も寝よ。寝ないとたぶん体がもたねえ」。

そう思って立ち上がる。すると、そこには雪名がいた。

「うおっ!?! ……んだよ。びっくりさせんなよ」

「……椎名君が勝手に驚いたんだけど」

「美歌は？」

「寝た」

「……そか。で？ どうした？」

「えと、その、いろいろ謝りたくて……」

どこか俯き加減で答える雪名。そんな雪名に俺は歩みより、そつと頭に手を置く。

「別に謝る事なんてないさ。お前はお前のやるべきことをやっただけなんだろう？ なら引け目を感じることないじゃいか。じゃ寝よつぜ」

そういつて俺はリビングを後にした。すぐ後ろに雪名がついて来ているのがわかる。階段を上がりながら俺は考える。

……でもまあ、謝られても困るが、はた迷惑な事が多数あったのは確かだな。でも、まあ、それも明日からなくなるだろ。何てったって……。

「ん？」

「どうかした？」

俺はそこまで考え、あることに気づいた。二階に上がってすぐにある美歌の部屋の前で立ち止まる。因みにその隣が姫歌、さらに隣が俺の部屋だ。

「なあ、雪名。お前は確かこう言ってたよな。『今までの行動は姫歌と美歌を怒らせるため』だって。ってことはつまり、姫歌達を怒らせる理由が無くなった今、もう破天荒な行動はしないよな？」

そこまでいえばわかるはずだ。あの結婚宣言のような事はもうしないよな？ という意味だ。だが、雪名は 暗闇で見えないが 微かに笑ったようにして、口を開いた。

「ねえ、椎名君。ソレはソレ。コレはコレって言葉知ってる？」

「ああ、知ってるけど……？」

「じゃ、そういうことだから」

そう吐き捨てた雪名はそそくさと美歌の部屋へと入って行った。

「……は？ え！？ どゆこと!？」

雪名の言ってることの意味は些か理解しえなかったが、もう、どうでもいいとばかりに、自分の部屋へと入り、飛び込むようにベッドに横になる。

するとそれまで全くなかった眠気が出てくる。やっぱり、相当疲れてたんだなと思いつつ、目を閉じる。

完全に眠りつく直前、ミーナに連絡することを完全に忘れていたことに気づく俺がいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6243w/>

神様の落とし物

2012年1月2日05時53分発行